

生徒の実態に即した「世界史A」の授業改善の試み

岐阜工業高等学校 川井正士

はじめに

平成6（1994）年4月は、私が19年目の教員生活を、3年目となった羽島北高校で迎えた年であった。そして、そのときから新学習指導要領（以下、学習指導要領を指導要領と略す）がスタート、世界史が必修科目となった。この新指導要領が告示された平成元年は、文字どおり平成時代のスタートの年であったが、西暦1989年としてみれば、この年が世界的にみて大きな転換の年であったことに気づく。この年の6月に天安門事件、11月にベルリンの壁崩壊、12月マルタ会談による冷戦の終結があり、世界の歴史は大きく動いた。このような時代背景もあり、国際化社会の進展に応じた人材育成のために世界史的な知識が不可欠との理由で世界史が必修科目となり、科目「世界史A」も設置された。それ以来、私はこの科目と関わることとなった。しかし、現場では世界史のみ必修ということに対する不満が強く、また、大学入試での世界史選択者が日本史のそれに比べて少ないという現象が生じた（平成20<2008>年度のセンター試験受験者数をみても、世界史Bの受験者数は日本史Bの受験者数の約65.4%である）。ただし、大学入試に関わる数値だけをもって世界史必修の是非を論じたり、生徒の世界史に対する関心度を推測したりすることは危険である。なぜなら、大学入試での世界史選択者減少には、平成10（1998）年の指導要領改訂の際の中学校社会の歴史的分野における世界史的内容の削減が関わっているように思われるからである（この点については、後で詳述する）。さらに、平成18（2006）年に全国的话题となった「未履修問題」において、とくに「世界史A」が矢面のような立場に置かれたときにも、この世界史のみ必修とすることへの異議が再燃した。この件に関しては、地歴・公民科教師として大いに私見を展開した

いところではあるが、本誌面の内容にそぐわないので割愛する。しかしながら、このときに感じたことは、中学校新課程で削除された「マホメット」「イスラム教」「コーラン」などの歴史的内容（この他の削減箇所も含めて、後で詳述する）を、高校でも学習するチャンスを逃してしまってよいのだろうか、それらの知識もなく大学へ進学して（さらには社会人となって）よいのだろうか、といった点である。21世紀に入ってからでも、米国での同時多発テロ、ロシアでのモスクワ劇場占拠、イラク戦争、新疆ウイグル自治区問題などのイスラム関連の事件が続いているが、たとえ大ざっぱにでも、ニュースという現在史を理解するための歴史的な基礎知識を、全高校生に身につけさせる義務が、われわれ教師に課せられているはずである。

私は平成11（1999）年度より岐山高校に赴任したが、同校は理数科と理系で各学年5クラスあり、理系大学をめざす生徒に「世界史A」を教える機会を得た。「世界史A」は受験に関係ないという意識の生徒が多い中で、これをいかに教えるかを自問した。結果、理系生徒のための世界史A、大学受験生のための世界史Aを教えようという結論に至り、授業改善を試みた。ここでの経験は、自分にとっても、生徒たちにとっても、学問の本質、学習の本質にふれたものとなり、次の赴任校である本校での授業改善の基礎となった。教職歴30年以上となる者が、今頃授業改善の基礎などと恥ずかしい限りであるが、本校においては工業高校生のための世界史Aを実現すべく、日夜授業改善に取り組んでいる（なお、本校は「笠工」の愛称を持つ、サッカー等の強豪校でもある）。

このたび、当誌面において、私の拙い授業改善の内容を紹介する機会をいただいたが、あと数年となった私の教職歴の自己反省とでも受け取ってもらえれば幸甚の至りである。

科目「世界史A」の登場まで

最初に、戦後の高等学校科目「世界史」の変遷をみてみたい。流れが把握しやすいように一覧表を作成した。

つくられていったのが実状であった。ようやく昭和26年になって、科目「世界史」の教科書が数社から出版された。そのうちの1冊が山川出版社の『世界史』（史学会編）であるが、これが後の『詳説世界史』に発展する（次ページの表）。

山川出版社をはじめとする数社の教科書は、なぜか

告示年	告示文書等の名称	科目「世界史」の扱い
昭和22 (1947)	「新制高等学校の教育課程に関する件」	選択教科社会：東洋史（5）・西洋史（5）
23 (1948)	「新制高等学校の教育課程の改正について」	社会5科目中の選択科目：世界史（5）
26 (1951)	「学習指導要領一般編（試案）改訂版」	同上
31 (1956)	「高等学校学習指導要領一般編改訂版」	社会4科目中の選択科目：世界史（3ないし5）
35 (1960)	「高等学校学習指導要領」	社会7科目中の選択科目： 世界史A（3）または世界史B（4）
53 (1978)	「高等学校学習指導要領」昭和53年改訂版	「現代社会」必修以外記述なし。世界史（4）
平成元 (1989)	「高等学校学習指導要領」	地理歴史科目となる。世界史必修： 世界史A（2）または世界史B（4）
11 (1999)	「高等学校学習指導要領」	同上
20 (2008)	「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申）	同上

（）内は標準単位数

(<http://www.nicer.go.jp/guideline/old/> より編集)

私のような50歳代の教師ともなると、この表を見るだけでも自分の高校時代、新任時代、さらには現在に至るまでの教職時代が、指導要領の変遷とともに思い出されて懐かしい。とくに、平成元年に告示、同6年度より施行の指導要領では、社会科を地理歴史科と公民科とに再編、「世界史」の必修科目化、科目「世界史A」の設置など、高校世界史に大きな転機をもたらした。次に、上表に関して簡単にその内容を述べたい。

昭和22年に示された「新制高等学校の教育課程に関する件」においては、社会科の科目の一部として「東洋史」・「西洋史」を設置している。当時は「世界史」という学問概念がなかったためだが（現在でも、「世界史学科」を設置している大学にお目にかかったことはない）、翌23年に示された「新制高等学校の教育課程の改正について」においては、この2科目をことばのうえで統合し、「世界史」という名称を冠した。しかし、科目名はあっても教科書も指導要領もない状態であり、当時の教師たちは東洋史や西洋史の書籍を利用したり、2人で2分野を分担授業したりした。科目「世界史」が設置されてから、「世界史」という概念が

「学習指導要領一般編（試案）改訂版」よりも前に登場した。次ページの表を見ればわかるように、現在の教科書とほぼ同様の内容の「世界史」教科書が、指導要領もない無から生まれ、科目「世界史」の体裁が一応整ったのである。

昭和35年の指導要領改訂では、「世界史A」（3単位）と「世界史B」（4単位）が登場した。両者の違いを「高等学校学習指導要領」の記述そのもので比較をしてみると、「世界史Bは世界史Aの場合よりも深めて取り扱う（中略）適当な主題を選び、政治的、経済的、社会的な観点から総合的に学習させる」（傍点筆者）とある。それ以外は「目標」「内容」ともに文章それ自体同一で、単位数の差も1単位であることからすると、学習内容に顕著な差があったとは思われない。実は、私の場合、昭和45（1970）年に三省堂の『世界史B』で授業を受けていたが、当時「世界史A」には縁がなく、両者の教科書の記述内容の差を知る由もなかった。ただ、現在の「世界史A」「世界史B」のような大差はなかった（**当時** A = 300p. B = 402p. **現行** A = 255p. B = 412p. すべて山川出版社で比較）。

第1章	先史の世界	第11章	ヨーロッパ絶対主義の成立
第2章	文明の発祥	第12章	中国民族の再興と北方民族の再制覇
第3章	西洋の成立	第13章	資本主義の発展と民主主義
第4章	インド・中国の古典文明	第14章	市民社会の成長
第5章	東亜文化圏の形成	第15章	自由主義と国民主義
第6章	イスラム文化圏の形成	第16章	ヨーロッパ勢力とアジア進出
第7章	ヨーロッパ封建社会の成立	第17章	帝国主義と第一次世界大戦
第8章	中国社会の変化と蒙古民族の発展	第18章	全体主義の台頭と第二次世界大戦
第9章	西欧中世世界の変化	第19章	われわれの時代
第10章	近代ヨーロッパの誕生	(http://home.att.ne.jp/wave/natsu/ryo/sekaisi3.htm 参照)	

た、平成6年度以来の世界史必修と科目「世界史A」は継続中である。前述のように、昭和35年登場の「世界史A」と「世界史B」の内容は僅差であり、また、昭和35年「世界史A」と平成元年「世界史A」は性格を異にする。その意味では、現

昭和53年に改訂された指導要領は昭和57（1982）年度から施行され、このときに科目「現代社会」が登場した。この新科目の登場に、われわれ社会科教師は不安と期待を抱いたが、現代が抱える問題を学ぶ正に現在史の学習でもあり、その後一つの公民科科目としてしっかりと定着し、現在に至っている。この改訂においては、世界史はA・Bの区別を止め、「世界史」のみとなった。しかし、その内容は前課程「世界史B」とほとんど変わるところはなかった。

平成元年の学習指導要領の改訂においては、「思考力、判断力、表現力等の育成」や「自ら学ぶ意欲や主体的な学習」が重視されたが、われわれ社会科教師にとっては社会科の改編と世界史の必修修化が最大の関心事であった。従来の社会科を地理歴史科と公民科の2つに分けるとする告示を、慣れ親しんだ社会科との決別という悲観論と、数年で再び社会科に統一されるだろうという楽観論の両方の想いで受け止めていたのは、私のみではなかったと思う。あれから20年、両科の統一は起きていないが、実態は1教科に等しい。ま

科目「世界史A」の出発時点を平成元年に置いても差し支えないだろう。

科目「世界史A」

さて、平成6年度から現場に登場した「世界史A」と「世界史B」との間には、どのような差異があるのか。まず、指導要領に示された両者の目標を比較してみる（下表）。

このように両者を比較してみると、「世界史A」が近現代史の学習に重点を置き、その学習目的が現在の世界諸国相互の関連性を多角的に把握することにあることがわかる。「国際化の時代」を生きる生徒全員にこの目標を達成させるため、世界史が必修修科目とされたのである。

こうして、いよいよ新科目「世界史A」の授業がスタートしたが、しだいにその進めにくさを感じるようになった。当時、同様に感じた「世界史A」の授業担当者は、多くいたはずである。その原因は「世界史

～～部分が、他方にはない表現

「世界史A」の目標	「世界史B」の目標
現代世界の形成の歴史的過程について、 <u>近現代史を中心に理解させ、</u> <u>世界諸国相互の関連を</u> <u>多角的に考察させることによって、</u> 歴史的思考力を培い、 国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う	現代世界の形成の歴史的過程と 世界の歴史における各文化圏の特色について理解させ、 <u>文化の多様性・複合性や相互交流を</u> <u>広い視野から考察させることによって、</u> 歴史的思考力を培い、 国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う

上表の波線部分をつなぎ合わせると、次のようになる。

「世界史A」	近現代史を中心に、世界諸国相互の関連を多角的に考察させる
「世界史B」	各文化圏の特色を理解させ、文化の多様性・複合性や相互交流を広い視野から考察させる

A」の内容にあった。この問題点について考えるために、平成元年指導要領で示された「世界史A」の内容と、その改善型である平成11年度指導要領の内容を比較してみたい。

安堵感を、今でも覚えている。すなわち、新指導要領においては旧指導要領の(2)＝輪切りの世界史部分が消え、歴史の記述が連続するように改善されて①の問題点が一応払拭され、その結果として、②の重複の

平成元年に示された内容（平成6年度より施行）	平成11年に示された内容（平成15年度より施行）
(1) 諸文明の歴史的特質 ・文明と風土 ・東アジアと中国文化 ・南アジアとインド文化 ・西アジアとイスラム文化 ・ヨーロッパとキリスト教文化 (2) 諸文明の接触と交流 ・2世紀の世界 ・8世紀の世界 ・13世紀の世界 ・16世紀の世界 ・17・18世紀の世界 (3) 19世紀の世界の形成と展開 ・19世紀のヨーロッパ・アメリカ ・産業革命と世界市場の形成 ・アジア諸国の変貌と日本 (4) 現代世界と日本 ・二つの世界大戦と平和 ・アメリカ合衆国とソビエト連邦 ・民族主義とAA諸国 ・地域紛争と国際社会 ・科学技術と現代文明 ・これからの世界と日本	(1) 諸地域世界と交流圏 ・東アジア世界 ・南アジア世界 ・イスラーム世界 ・ヨーロッパ世界 ・ユーラシアの交流圏 (2) 一体化する世界 ・大航海時代の世界 ・アジアの諸帝国とヨーロッパの主権国家体制 ・ヨーロッパ・アメリカの諸革命 ・アジア諸国の変貌と日本 (3) 現代の世界と日本 ・急変する人類社会 ・二つの世界戦争と平和 ・米ソ冷戦とAA諸国 ・地球社会への歩みと日本 ・地域紛争と国際社会 ・科学技術と現代文明 <注>アジア・アフリカ諸国をAA諸国と記した。

平成元年に示された「世界史A」の内容は、(1)の「諸文明の歴史的特質」で各地域の文明の成立や特質を概観し、(2)の「諸文明の接触と交流」において「2・8・13・16・17～18世紀」の各世紀の世界を同時代史的にとらえ、(3)の「19世紀の世界の形成と展開」と(4)「現代世界と日本」の近現代史に本来の重点を置く、という方針であった。しかし、とくに(2)における輪切りの世界史が、①歴史が本来有する連続性を非連続的なものにしてしまったこと、②「諸文明の接触と交流」理解のための各世紀の内容が(1)と数箇所において重複すること、という問題点を露呈した。この点は、平成11年告示の指導要領において改善されている。われわれ現場の声が届いたかは定かでないが、新指導要領用の教科書を初めて手にしたときの

問題点もなくなったため、である。また、旧指導要領でのねらいであった「諸文明の接触と交流」についても、新指導要領では(1)の「ユーラシアの交流圏」の部分で補完されている。この部分を下の表に示す。

このように、平成元年に登場した科目「世界史A」は、紆余曲折の道をたどりながらも、文部科学省・教科書関係者・現場教師などの努力によって順調に育ってきたし、これからも一層の改善がなされていくはずである。平成20年1月17日に中央教育審議会が答申した、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」においても、「世界史A」・「世界史B」より1科目必修という、現行の継続が示された。答申によれば、世界史必修継続の理由を「小・中学校において、日本史や日本及

(ア) 海域世界の成長とユーラシア	ムスリム商人のインド洋進出、中国商人の南シナ海進出
(イ) 遊牧社会の膨張とユーラシア	内陸アジアの騎馬遊牧民・オアシス都市の活動、モンゴルによる一体化
(ウ) 地中海海域とユーラシア	イタリア商人による東方貿易、イスラーム文明のヨーロッパへの流入
(エ) 東アジア海域とユーラシア	大都を拠点とする東西交流、黄海・東シナ海における交易の活性化

び世界の地理の学習が行われているという現状を踏まえると、高等学校における現行の必修科目の定めには一定の合理性があり、現実的な選択肢である」として、小・中学校における世界史的分野の学習量が極めて少ない（少なくなった）ことに配慮している。

中学校における世界史学習の現状

中学校における学習指導要領の改訂は、平成元年（施行は平成5年）と平成10年（施行は14年）に行われている。実は、この両方における社会科歴史的分野の内容を調べてみると、世界史の内容に大きな差があることに気づく。いや、差というよりは大幅な削減としたほうが的を射た表現であろう。恥ずかしながら、私はこのことにしばらく気づかないまま、新指導要領で学んできた中学卒業生を教えてきた。しかし、平成17（2005）年度の高校2年生（すなわち、平成14 <2002>年度には中学2年生）に、中学校社会科の教科書を2冊使用したことを教えてもらった。彼ら平成14年度の中学2年生は、新指導要領への移行期間ということで、新・旧両方の教科書を使用したとのことだった。そして、翌15年度からは新指導要領完全実施ということで、新指導要領に従った内容の教科書・授業となった。この平成15年度中学2年生を経験した平成18年度高校2年生、彼らに対する「世界史A」の授業において、私は生徒たちの異変に気づいた。「この内容は中学校でやっただろう？」という問いに対する生徒側の反応が、今一つ芳しくない。そこで、新・旧両教科書の世界史関係部分を徹底調査した。「嘩然！」というのが最も適当な表現であろう。新教科書では、世界史に関する学習内容が大幅に削減されていたのである。これは、平成14年度より実施された公立学校完全5日制による授業時間の削減、平成6年度より実施された高校世界史必修と関連している。すなわち、中学校で学ぶ「世界の歴史については、我が国の歴史を理解する際の背景として我が国の歴史と直接かかわる事柄を取り扱うにとどめること」（平成10年告示「中学校学習指導要領」社会〔歴史的分野〕内容の取扱い）となった。その結果削除された部分の補完義務を、高校の必修世界史が負うこととなった、と解釈できる。

さて、それでは削減の程度・内容はどのようなものであったか。最初に、一つのデータを紹介する。

<「中学校社会科歴史的分野」における世界史の内容の割合の変遷>

	昭和41年	昭和52年	昭和55年	平成5年
世界史(%)	34	31	33	29
出版社	A	B	C	D
	平成9年	平成14年	平成18年	
世界史(%)	25	16	17	
出版社	C	C	C	

「世界史の内容はどう扱われてきたか～中学校社会科歴史的分野の検討から～ 鈴木久男（千曲市立屋代中学校）より編集（<http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/event/suzuki.pdf#search> 参照）

上表からわかるように、中学校社会科歴史的分野における世界史の内容の削減割合は、平成9年から平成14年にかけてが最も大きい。約3分の2に大削減されたわけである。

次のデータを見てみよう。これは、私が2007年に調査したものである。

①<中学校における平成元年および10年指導要領「社会科歴史的分野」にみる世界史関連人物の比較>

平成元年指導要領教科書に掲載された人物のうち、平成10年指導要領教科書にも継続されたものを太字で示す。

アダム・スミス 安重根 アンネ=フランク イエス・キリスト **李舜臣** 李成桂 ウィルソン エラスムス **袁世凱** ガリレイ カルバン 鑑真 ガンディー クロムウェル ゲーテ 玄奘 広開土王 孔子 洪秀全 コペルニクス ゴヤ ゴルパチョフ コロンブス シェークスピア **始皇帝** シャカ 蒋介石 ショパン スターリン スパルタクス **孫文** ダンテ チンギス=ハン 杜甫 **ナポレオン** ニュートン 白居易 ヴァスコ=ダ=ガマ ハンムラビ王 ビクトリア女王 **ピスマルク** ヒトラー 武帝 **フビライ=ハン** フランシスコ=サビエル ベートーヴェン マゼラン マホメット マルクス **マルコ=ポーロ** ミケランジェロ ムツォリニ **毛沢東** モンテスキュー 李白 リンカーン ルイ14世 **ルイ16世** ルーズベルト ルソールター レーニン **レオナルド=ダ=ヴィンチ** ロック ワシントン

65名→28名

（岐阜県公立中学校使用、C社の教科書にて比較）

②<中学校の平成10年指導要領「社会科歴史的分野」における、世界史関連事項の削減内容概略>

平成元年と比較して、平成10年指導要領教科書では次のような削減が行われた。

- (1)古代ギリシア・ローマ史
- (2)中世ヨーロッパ史のほぼ全部
- (3)ユダヤ教・イスラム世界
- (4)ヒンドゥー教の成立課程
- (5)「ルネサンス」の内容
- (6)イギリス市民革命
- (7)社会主義
- (8)奴隷貿易・奴隷解放宣言
- (9)アジア・アフリカの独立

(岐阜県公立中学校使用、C社の教科書にて比較)

上記①②のデータから明らかのように、ヨーロッパ史や西アジア史（とくにイスラム史）に関する人名や事項が大幅に削減された。とくに、「我が国の歴史を理解する際の背景として我が国の歴史と直接かわる事柄」と判断されなかった部分である。したがって、古代ギリシア・ローマ史も、イスラム史も学習されない。イスラム史にいたっては、イスラム教の名も、アラーも、マホメットの名も知らないまま、同時多発テロやイラク戦争のニュースに遭遇する。社会主義の意味がわからないまま、冷戦崩壊を学ぶ。米国に多くの黒人の人たちがいる理由も、しっかり理解しているか不安である。

中学校「歴史的分野」に記載の世界史用語 新・旧課程比較 時代順分類表 (抜粋)

黒字＝新課程では非掲載の用語

	ヨーロッパ
先 史	クロマニヨン人 アルタミラ
古 代	アルファベット ギリシア文明 都市国家 ポリス アテネ オリンピア 民主政治 キリスト教 ローマ字 ローマ帝国 キリスト教迫害 スパルタクスの反乱 キリスト教公認 西ローマ帝国
中 世	東ローマ (ビザンツ) 帝国 ギリシア正教 正教会 スラブ人 ゲルマン人 農奴 ローマ教皇 カトリック教会 聖地巡礼 十字軍 封建制度 諸侯 騎士 フランク王国 ラテン語 大学 ギルド 「都市の空気は自由にする」
近 代	ルネサンス 『神曲』 ダビデ像 地動説 火薬 羅針盤 印刷術 ポルトガル スペイン 喜望峰 インド到達 免罪符 宗教改革 プロテスタント イエズス会 カトリック 農民戦争 オランダ独立 無敵艦隊 植民地 絶対王政 官僚制 常備軍

	ロシア 工場制手工業 権利の章典 清教徒革命 共和政 名誉革命 三権分立 人民主権 議会政治 社会契約説 啓蒙思想 百科全書派 人権宣言 フランス革命 国民議会 バスティーユ牢獄 ロシア遠征 共産党宣言 産業革命 世界の工場 『諸国民の富』 『共産党宣言』 保守党 労働党 シベリア鉄道 鉄血政策 ドイツ帝国 農奴解放 バルカン半島 クリミア戦争 ドイツ憲法 社会民主党 ルーブル美術館 ロマン主義
現 代	労働党内閣 ヨーロッパの火薬庫 セルビア人 サラエボ オーストリア皇太子夫妻暗殺 西部戦線 戦車 毒ガス 飛行機 共産党 ベトログラード ロシア革命 ソビエト シベリア出兵 ソビエト社会主義共和国連邦 一党独裁 干渉戦争 五か年計画 ワイマール憲法 ナチス ナチス政権 ファシスト党 ファシズム 全体主義 エチオピア侵略 ポーランド攻撃 独ソ不可侵条約 ユダヤ人迫害 アンネの日記 レジスタンス 日独防共協定 日独伊三国同盟 枢軸国
戦 後	北大西洋条約機構 ドイツ民主共和国 ドイツ連邦共和国 ハンガリーの民主化介入 チェコスロバキアの民主化介入 ベルリンの壁 ワルシャワ条約機構 ヨーロッパ経済共同体 ヨーロッパ共同体 ヨーロッパ連合 ポーランドの自主的労働組合 東欧諸国の民主化 ソ連の解体 東西ドイツの統一 ベルリンの壁崩壊

中学校「歴史的分野」に記載の世界史用語 新・旧課程比較 時代順分類表 (抜粋)

黒字＝新課程では非掲載の用語

	中国・朝鮮・日本
先 史	北京原人 火・言葉の使用
古 代	黄河 中国文明 殷 甲骨文字 周 儒学 儒教 春秋・戦国時代 秦 兵馬俑 万里の長城 漢 楽浪郡 紙の発明 遊牧民族 高句麗 シルクロード 魏 蜀 呉 漢民族
中 世	百済 新羅 任那 白村江の戦い 南北朝 均田制 隋 大運河 遣隋使 唐 租庸調 律令 長安 遣唐使 唐三彩 宋 朱子学 陽明学 羅針盤 火薬 印刷 禪宗 モンゴル帝国 元 大都 元寇 『西遊記』 高麗 明 李氏朝鮮 ハングル 琉球
近 代	清 広州 三角貿易 アヘン戦争 太平天国 南京条約 不平等条約 香港 上海 南京 領事裁判権 江華島事件 日朝修好条規 甲午農民戦争 東学 台湾総督府

	日清戦争 下関条約 三国干渉 台湾・澎湖諸島割譲 中国分割 遼東半島 旅順 大連 九龍半島 威海衛 膠州湾 義和団事件 満州 日英同盟 日露戦争 ポーツマス条約 大韓帝国 韓国統監府 韓国併合 朝鮮総督府 三民主義 辛亥革命 中華民国 南京
現代	二十一か条の要求 五・四運動 三・一独立運動 中国共産党 中国国民党 国民政府 満州国 満州事変 抗日民族統一戦線 柳条湖 日中戦争 盧溝橋事件 真珠湾攻撃 太平洋戦争 ミッドウェー海戦 ポツダム宣言
戦後	中華人民共和国 大韓民国 朝鮮民主主義人民共和国 朝鮮戦争 文化大革命 サンフランシスコ平和条約 日韓基本条約 日ソ共同宣言 日米安全保障条約 日中平和友好条約 天安門事件 韓国・北朝鮮の同時国連加盟

なお、ヨーロッパと中国・朝鮮・日本については掲載したが、上記の他の地域については、帝国書院の『世界史のしおり』2007年10月号のp.11～13に詳細（拙著）を掲載してあるので、ご一読いただければ幸いです。（http://www.teikokushoin.co.jp/teacher/high/history_world/index_200710.html）

中学校における世界史学習の実態の周知

問題なのは、このような事態が生じていることを世の大人たち、教師たちがどれほど把握しているかということである。また、2006年のような世界史の未履修という事態があると、未履修の対象となってしまった生徒は、上述程度の世界史の知識しか学習しないことになる。このような実態を把握したうえで、各教科の授業を展開する必要がある。以下は他教科の学習内容の実例である。

—国語の例—

紀元前八世紀から前五世紀までの春秋時代は、諸侯

が覇を競う抗争の時代であった。この時代の末期に長江の下流域に国境を接した呉・越の两国は、互いに報復を繰り返し、存亡をかけた争いを続けていた。

（大修館「国語総合」－臥薪嘗胆－）

—数学の例—

ローマ文化は今からおよそ2600年前、イタリア半島の中部に建設された都市国家から発展した。このころから用いられている数字をローマ数字といい、……、ローマ数字は現在まで受け継がれている。

（実教出版「数学基礎」－古代ローマの記数法－）

—理科の例—

古代ギリシアでは、「こはく」をこすると軽い物体を引きつけることが知られていた。ギルバート（イギリス、1544～1603）は「こはく；エレクトローン」にちなんで「電気」と名づけた。

（数研出版「物理Ⅰ」－電磁気学の誕生－）

—音楽の例—

古代ギリシアでは、音楽、詩、舞踊が生活と密着しており、祝祭、饗宴、競技、戦争などと深い結びつきを持っていたといわれる。

（教育出版「音楽Ⅰ」－ギリシアの音楽－）

—英語の例—

During the period 1000 to 1200, most medieval church builders used the round arches, domes, and horizontal lines of Roman architecture.

（増進会出版社「速読英単語上級編」）

このように、他教科でも世界史に関わる学習内容が登場するが、旧課程程度の世界史の知識を生徒が有していると思って授業をするのは好ましくない。われわれが高校世界史を授業する場合、中学校での世界史の学習内容や他教科の世界史関連の学習事項を把握し、そのことを他の教科担任にも周知するようにすべきだと考える。

「世界史A」の授業展開にあたって

さて、実際に「世界史A」の授業を展開するにあたって、とくに見落としてはならない点は何か。それは、中学校での世界史関連の学習内容の実態を知ることである。前述のとおり、平成14年度以降の中学校入学者、

換言すれば、平成17年度以降の高校入学者は、中学校において平成10年改訂の指導要領に示された内容で学習してきた生徒であり、したがって、彼らが中学校で学習してきた内容は、前述のように世界史分野が大幅に削減されている。これが実態である。また、地理についても、旧指導要領とは大きく異なる学習内容となっている。こういった実態については、他教科の教師も把握しておく必要がある。なぜなら、他教科においても世界史に関連する学習内容は多々あり、生徒が中学校で旧指導要領レベルの世界史関連の内容を学習してきたと勘違いして授業すると、授業が空転しかねないからである（前掲書：帝国書院『世界史のしおり』2007年10月号参照）。

次に留意すべきことは、前近代史についてのポイントを十分把握させることである。平成16年、中教審の初等中等教育分科会に寄せられた意見の中には、必修科目「近現代史」を創設し、世界史教育は近現代史のみでよい、というような意見も複数みられる。しかし、前近代史の把握なくして、近現代史の十分な理解はありえない。たとえば、パレスチナ問題一つとってみても、ユダヤ教の成立、ディアスポラ、ゲットー、イスラーム教の成立、ジハードなどの前近代史部分を把握しなければ、その本質は理解できない。とくにパレスチナ問題は、現在進行形・未来進行形であり、高校卒業後も、その理解を求められる場面が多いはずである。近現代史は前近代史に起因する、という視点を大切にしたい。パレスチナ問題以外の例にしても、枚挙にいとまがない（例示は省略する）。

「世界史A」の授業改善の試み

生徒たちにとって、「世界史A」という科目は暗記科目、机上の学習と映りやすい。とくに教科書だけで授業を進めれば、よけいにそうならざるを得ない。また、受験科目でもない「世界史A」の授業に関心を示さない生徒も多い。この現状を打破するためには、やはり「身近な教材」を利用し、生徒たちに学習効果を実感させ、学習意欲を喚起する必要がある。平成19年6月の学校教育法の一部改正で盛り込まれたように、生徒たちに対して「生涯にわたり学習する基盤が培わ

れる」授業、将来においても「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力」などを発揮できる力を養う授業、それらを実現するために「主体的に学習に取り組む態度を養う」授業こそ、「世界史A」に求められている。

以下は、このような観点に立った、私の授業における「身近な教材」、いわゆる「授業のネタ」の紹介である。ご存知のものも多いと思うが、その中で一つでもご利用いただけたり、あるいは、このような授業手法もあるという参考にしていただけると幸いである。ただし、前近代史の内容の「授業ネタ」がほとんどであることを、ご容赦願いたい。

①中国・朝鮮史に関しての「授業ネタ」の例

- ・夏王朝最後の王による政治は「塗炭の苦しみ」と表現された。（テスト前の心境？）
- ・殷の紂王の暴政は「酒池肉林」の四字熟語となった。（ごちそうの時、使ってみよう）
- ・周の文王が見出した呂尚こそ「太公望」。（一般的には、何の好きな人のことに使われている語かな？）
- ・呂尚に関する「覆水盆に帰らず」。＝It is no use crying over spilt milk.（英語の重要構文でも学習）
- ・周が岐山より興り天下統一の故事にあやかり「岐阜」と改名。（岐山高校の生徒手帳にも記載）
- ・春秋戦国時代の「漁夫の利」「完璧」「臥薪嘗胆」等。（関商工高校男子バレーボール部横断幕）
- ・諸子百家の「温故知新」「出藍の誉れ」「大器晩成」「五十歩百歩」等。（韓国の教科書にも登場）
- ・漢代の「背水の陣」。（新聞によく使用）「四面楚歌」。（漢文で学習）「虎穴に入らずんば虎子を得ず」。
- ・劉備と孔明の「水魚の交わり」（漢文の教科書にも掲載）。孔明による「泣いて馬謖を斬る」。
- ・「呉服」とは、三国時代の呉から来た服の意味。（岐阜市内の呉服屋さんにも確認してみました）
- ・「弱肉強食」「頭角を見ず」は、唐代の詩人韓愈の言葉。（□肉□食を焼肉定食と答えた生徒あり）
- ・高麗はKoreaの語源。（南北朝鮮が統一されると、高麗と名乗るかも？）
- ・科挙を起源とする言葉として、「落第」「圧巻」「破天荒」等がある。（それぞれ意味がある）
- ・大理から採掘される石が大理石。（この国のあった

- 雲南省は、雲の多い地域の南に位置する)
 - 宋代の朱子は、「光陰矢の如し」「徹頭徹尾」「精神一到、何事か成らざらん」の語を残した。
 - 中国の「茶」は、ポルトガル語のcha、英語のteaになった。(発酵茶が紅茶、半発酵茶が烏龍茶)
 - 英単語のchinaが陶磁器、japanが漆器を意味する。(どこからヨーロッパに伝わったかな?)
 - 鄭和は、アフリカのジラフを皇帝に献上→「きりん」と命名。「麒」は雄、「麟」は雌)
 - 『康熙字典』は、漢和辞典の元。(生徒の使う漢和辞典の最初に記載あり。電子辞書には、ないと思うが)
- ②インド・東南アジア史についての「授業ネタ」の例
- 釈迦の遺骨(シャーリ)が米粒のように粉碎された→寿司屋の隠語「シャリ」。(有名な話)
 - 釈迦の遺骨を納めた所がストゥーパ→卒塔婆。(この言葉は、一般の人でも比較的知っているよ)
 - 岐阜市内に「ウパーリ美容室」というのがあるが、ウパーリさんは釈迦の髪結い係だった。
 - サンスクリット文字(梵字)は、五輪塔などに記載されている。(墓石屋さんは詳しい)
 - 檀那とドナーは語源が同じ。(サンスクリット語のdana=喜捨人が東西に伝播。印欧語の説明に最適)
 - 「挨拶」「我慢」「極道」「内証」「脱落」「覚悟」「会釈」など、仏教語起源の語は山ほどある。
- ③古代オリエント史についての「授業ネタ」の例
- クフ王のピラミッドの底辺の周囲920mを高さ146の2倍で割るとどんな数?(円周率に近い)
 - パピルスはpaperの語源。
 - 古代エジプトでは分数が発達したが、3分の2以外は、なぜか分子が1。(5分の2=3分の1+?)
 - 古代エジプト人も、3:4:5で直角になることは知っていた。(測量術が発達した理由は?)
 - 「月」=moonとmonth、「日」=dayとdaylight、各々2つ意味があるのはなぜ?
 - アルファベット = $a + \beta$ ($a \cdot \beta$ の文字からも、アルファベットがギリシアに伝播したと想像できる)
 - 『旧約聖書』に出てくる「サムソン&デリラ」は、美容院名にもある。(なぜか、わかるかな?)
 - レバノンの国旗には、なぜ杉の木が?(もちろん、地中海で活躍したフェニキア人の船の材料)
 - 社標MAZDAはアフラ=マズダに由来。なぜかな?(なぜ松田をMATSUDAと綴らないのか)
- ④イスラーム史についての「授業ネタ」の例
- メッカは、当然イスラーム教の聖地だが、転じて、何かの発祥地をも意味する。(～のメッカ)
 - スペインのアンダルシア地方は、今もアラブの香りを残す。(フラメンコもアラブ系)
 - トルコ語の語順と日本語の語順は酷似しており、トルコ語にも助詞がある。(なぜだろうか)
 - サウジアラビア国旗の剣と文言の意味は?(サッカーの強い国なので、この国旗を知る生徒も多い)
 - ファストフード店では、ムスリム用のメニューがある。(だめな物は何だろうか)
 - 数学者アルフワリズミーは、移項法を考案した人物。(この方法を習ったとき、便利さを実感したね)
 - インドで発明された数字をヨーロッパ人がアラビア数字と呼んだ。(数字の伝播順がわかる)
- ⑤ヨーロッパ史についての「授業ネタ」の例
- トロヤ戦争に登場する人物に由来のアキレス腱の話。(ブラッド=ピット主演の映画「トロイ」紹介)
 - polis → police、demokratia → democracy、Platon → Platonic love (ギリシア語語源は多い)
 - ギリシア文字は数学でも使用される。(英語の発音記号 [θ] もギリシア文字って、知ってた?)
 - 哲学者タレスは、「三角形の相似」の発見者でもある。(ピラミッドの高さの測定は有名)
 - 数学者ピタゴラスは、音階の創作者でもある。(音階も整数比。また、音階は等比数列→ギター)
 - 勝利の女神「サモトラケのニケ」→^{ナイキ}NIKE (ナイキのマークは、この作品の羽の形より考案)
 - アルキメデスの「浮力の原理」の発見。(偽の冠の話)を紹介(原理の内容を知らない生徒が多い)
 - アルキメデスは、円周率を3.1428…と計算。(その測定方法は、まさに積分の元祖!)
 - 数学で学ぶ「ヘロンの公式」「メネラウスの定理」も、古代ギリシアの数学者の偉業。
 - エラトステネスの行った「地球の大きさの測定」に挑戦。(「三角形の相似」が使われている)
 - 「黄金比」→「ミロのヴィーナス」「パルテノン神殿」など。(「一方通行」の看板にも使用。)

- ・スバルタクスの反乱→映画「グラディエーター」紹介。(歴史を学んでいると、映画も楽しい)
- ・カエサルユリウスのルビコン川渡河での「賽は投げられた」。(日常、よく使う言葉だね)
- ・ローマ帝国の領土ダキアルーマニアは今のRomaniaだが、それは「ローマ人の国」の意味。(ラテン系！)
- ・コロセウム→コロシウム。(有明コロシアムのコンサートなどで、タレントたちも闘っている)
- ・古代ローマの時代は、「U」がなく、「V」を「ウ」にも使用。(これでBVLGARIIブルガリの綴りも納得)
- ・中世になって、「W」考案。読みから何を感じる？(ダブルVユだね。辻さん、加護さん)
- ・ヌマ暦では、1か月は29日 or 31日。でも2月のみ28日→1年は355日。(偶数は大嫌い！)
- ・ヌマ暦で、11月Januariusジャヌアリウス (Janusは物事の始まりの神)を1月に。(それで2か月ずつズレたのか。)
- ・7月のQuintilisユリウスをJuliusに変更したのはカエサル。(さて、彼の誕生日は何月？)
- ・アウグストゥスは、8月をAugustと改名(日数も30→31日に。29日だった2月から1日奪取)
- ・「豚に真珠」「砂上の楼閣」「目からウロコ」って聖書から出た言葉。(目からウロコ！)
- ・13日の金曜日が忌み嫌われる理由。(さいとうたかを作「ゴルゴ13」も関係あるぞ！と生徒が叫んだ)
- ・元日は、ユダヤの風習で、イエスの誕生の7日目をお祝いしたという説。(12月25日から7日目って？)
- ・聖ヴァレンタインも殉教との言い伝えあり。(それって、西暦269年の何月何日？)
- ・ミラノ勅令でキリスト教公認の話→生徒曰く、「ACミランはミラノにある」。(さすが、笠工！)
- ・ラテン語とラテンアメリカの関係→生徒曰く、「ロナウジーニョはポルトガル語」。(同上！)
- ・アルプス、アペニン、ライン、パリ、ドーバーなどケルト語由来。(北海道の地名由来と似てる)
- ・Mac-、O'などはケルト系の人名。(マクドナルドさんやマッカーサーさんも関係ありそう！)
- ・Angle + ish → English「英語」=アングロ族の言葉。(「ドイツ語」は「英語」の母です)
- ・FranceはFrancia (「フランク族に占領された所」)に由来。(フランケン、フランクフルトも関連)
- ・NormanノルマンはNorth man(北方ゲルマン)のこと。(だから、ノルウェーやデンマークなどはゲルマン系)
- ・Norman conquestは英語史上最大の事件。(庶民はpig飼育、貴族はpork賞味。porkはフランス語)
- ・フランス語のrespectを説明するlook up to表現誕生。(受験生泣かせの熟語は、こうして誕生した)
- ・英仏百年戦争は、「英語」独立戦争でもあった。(1300年中頃まで、イギリスではフランス語で授業)
- ・イギリスは連合王国。(1998年のワールドカップサッカーには、EnglandとScotlandが出場。わかる？)
- ・今も使われる「ドーム」も「モザイク」もビザンツ文化。(「モザイク」は、「消す」じゃないよ)
- ・slave(奴隷)は、Slavが語源。(中世には、多くのスラヴ民族が奴隷とされていた)
- ・Russiaロシアは「Russの土地」という意味。(それで、英語では「ルーシヤ」と発音するのか)
- ・ロシアはビザンツ帝国の後継者。2000年憲法でも「双頭の鷲」をロシアの紋章と制定。
- ・1861年、ロシアから函館にロシア正教伝わる。(夏目漱石『それから』にニコライ堂が登場)
- ・スペインの国旗を見ると歴史がわかる。(国旗内にカスティラ、アラゴン、ナバラ、レオン国旗あり)
- ・skhole(ギリシア語で余暇)→schola(ラテン語で学校)→school(学校って、暇な所？)
- ・R.ベーコンは、望遠鏡・顕微鏡・蒸気船・飛行機の発明を予言。(さすが、近代科学の先駆者)
- ・『アーサー王物語』のエクスカリバーはゲームにも登場。(♠も、この剣をデザインした)
- ・ステンドグラスはstained glass(着色されたガラス)の意味。(stainlessって、なぜピカピカ？)
- ・モルッカ諸島=香辛料諸島。(洋菓子アップルパイはシナモン、西洋料理ハンバーグはナツメグの香りが)
- ・ハンブルクのブルク、イスタンブルのブル、アドリアノーブルのプルは、「町」の意味。
- ・Renaissance(フランス語)のreは「再び」の意味。(英語にもたくさんあるね。例をあげてみよう)
- ・ダ=ヴィンチは、「永久機関」「飛行実験」などにも挑戦。(私事ですが、高校の物理で習った)
- ・ダ=ヴィンチの「da」やフランス語の「de」は、「～の」(eau de toiletteオードトワレは「トイレの水」なのか)

- ・ケプラーの「惑星運行の三法則」の一部を紹介。(極めてわかりやすいが、習わないと知らないまま)
- ・フィリピンはフェリペ王子に因む。(かつてスペイン領だったとわかるが、フィリピン人は承知?)

⑥アメリカ史についての「授業ネタ」の例

- ・仏語の地名例：バーモント=緑の山、デトロイト=海峡、～ヴィル=町。(なぜかな?)
- ・仏国王に因む地名例：ルイジアナ←ルイ14世、セントルイス←ルイ9世。(なぜかな?)
- ・英王族の地名例：メリーランド←王妃メアリ、コロライナ←チャールズ(カルロス)。
- ・スペイン語の地名例：フロリダ=花咲く、コロラド=着色された。(なぜかな?)
- ・原住民の語に因む例：ダゴダ=友人、ネブラスカ=広く平らな水、ミシシッピ(大河)。

以上、今までの授業の資料を基に羅列した。私的興味に基づくものが多いために、時代や地域に偏りがあったり、授業の進度を考えなかったり(生徒の表現を借りれば、脱線授業)と、とても生徒の「生きる力」の養成には及ばないが、授業「世界史A」を楽しく、少しでも「なるほど授業」になるように試みた。次に、本校生徒の感想を紹介する(意見をまとめるために、一部編集)。

「社会情勢理解」編

- イラク戦争、イェルサレム、中東のニュースなど、なぜ国家同士の争いが絶えないのか理解できた。
- 宗教に関する知識が海外旅行などで大切だとわかった。中国に旅行したとき、授業で習ったことが役立った。
- ヨーロッパの言語の類似性、ヨーロッパの起源と現在の国同士の関係などが、よく理解できるようになった。

「学習内容登場」編

- 小説を読んでいて、「胡椒」の価値の高さを再認識できた。小説中に、世界史で学習したことが出てきた。
- 漫画『HELLSING』にローマ、ナチ、プロテストスタントなどが出てくる。
- BUCK-TICKがコーランの逆再生を曲に使い、問題となった。
- テレビ番組(「ヘキサゴン」、「ネプリーグ」、「世界

不思議発見」等)の内容が理解できるようになった。

- 携帯電話に出てくるペーパーテストに答えることができた。
- ゲーム中の人物名や武器名(エクスカリバーなど)が使われている理由がわかった。
- 世界史で学んだことが、映画を観る時に役に立った。古代ローマに関する映画を観て、理解しやすかった。
- 登校中に、ウパーリ美容室やサムソン&デリラを発見した。
- auのCMやテレビ番組「動物の森」に授業で学んだブルトウスが出てきたとき、その意味が理解できた。
- 「戦場のイベリア」の曲中にアラゴン・カスティラが登場する。「ROMANESQUE」という曲がある。
- 宝塚歌劇団により「エクスカリバー」というのが上演されていた。
- 身近なことをたとえにしての授業で世界史の理解が深まり、普段の生活にも役立つことが多いと気づいた。
- デザイン科「デザイン史」の授業やテストにも世界史の授業内容が登場し、とても役立った。
- 文法中心の漢文の授業の内容が、あらすじ中心の世界史の授業のおかげで、よく理解できるようになった。

「雑学役立ち」編

- MAZDAやNIKEの社名の由来、商品や物の名の由来、出光のマーク(アポロ)の意味が理解できた。
- 「背水の陣」などの雑学が学べた。「背水の陣」を、実際の生活の中で使うようになった。
- 英語の豆知識・雑学が増え、英語に対する関心が高まった。
- 「アメリカ合衆国」が、なぜ「州」と表記されていないか、理解できた。
- アキレス腱やヴァレンタインデーの由来、Alps山脈の名の由来が理解できた。
- 国旗の意味を興味深く学習できた。

「知識周囲拡大」編

- 友だちにNIKEとアキレス腱の話をしてあげた。友だちにサムソン&デリラの名前の由来を教えてあ

げた。

- クイズ番組に授業で習ったことが出て正解できたので、家族が尊敬してくれた。
- 授業で習ったことを友だちや親に教えたら感心された。
- 友だちとの会話のレパートリーが増えた。他校の普通科の友だちに、授業で習った雑学を教えてあげた。
- テレビで授業内容が出てきたとき、それを家族に話し、家族の会話が増えた。
- 12月25日の7日後が元日というのを家族に話した。

おわりに

今回、最初に掲げたテーマに沿った内容で執筆する予定だったが、私の日頃の授業と同じく脱線型の代物になってしまった。また、これも私の別の悪い癖であるが、脱線してからも軌道修正することなく、断線の向こうに猛進してしまった。すなわち、「世界史A」の授業改善の試みの予定が、科目「世界史A」の歴史探索へと、自ら違う道へと迷い込んでしまった。ただ、その迷い込んだ道には、自分なりに発見した宝物もあり、高等学校科目「世界史」の登場とその変遷、とくに科目「世界史A」の存在意義をあらためて認識することとなった。ベテランの先生方には、私個人と同じ

く、この原稿は今までの教職歴を回顧するくらいの役にしか立たないと思うが、平成6年度以降の学習指導要領下で学んだ若い先生方も現場に登場する昨今、このような戦後世界史教育を回顧する機会があってもよいかと思う。

さらに、関心的是は中学校における世界史学習の現状にまで及んだが、そこから得た教訓が本稿執筆の原点である。すなわち、前掲の鈴木久男氏（千曲市立屋代中学校）の調査結果からもわかるように、「中学校社会科歴史的分野」における世界史の内容の割合が、昭和41年の34%から平成5年の29%を経て、さらには平成14年の16%へと、何と半減しているという現状である。このような現状を認識したうえで授業展開はどうあるべきか。その答えが、「身近な教材」、「授業ネタ」の利用である。昨今の生徒を取り巻く娯楽環境を観てみると、ゲーム・コミック・音楽・クイズ番組等の氾濫が目につく。しかし、よく観察してみると、それらの中には多くの「授業ネタ」が満載されていることに気づく（前述の、私の授業に対する本校生徒の感想参照）。したがって、私の「授業ネタ」は、生徒とともに絶えず変化・進化し続けている次第である。

最後に、日頃お世話になり、今回の原稿執筆にも参考にさせていただいたインターネット上の、世界史関係ホームページを紹介しておく。

- ・「WELCOME TO YOKOYAMA'S HOME PAGE」(<http://www3.kct.ne.jp/~atonoyota/>)
- ・「徹底歴史研究同盟」(<http://www.tetsureki.com/home/labo/hyakke/iriomote-01.html>)
- ・「やっぴらんど」(<http://www7b.biglobe.ne.jp/~yappi/>)
- ・「目で見える世界史（世界遺産と歴史の旅）」(<http://history.husigi.com/>)
- ・「地図の歴史」(<http://atlas.cdx.jp/history/history.htm>)
- ・「世界史講義録」(<http://www.geocities.jp/timeway/>)
- ・「The Purple Chamber」(<http://homepage3.nifty.com/ryuota/>)
- ・「世界史講座」(<http://homepage3.nifty.com/ryuota/whistory-index.html>)
- ・「コインの散歩道」(<http://homepage3.nifty.com/~sirakawa/Coin/>)
- ・「歴史大全」(<http://www.3hask.com/>)
- ・「歴史の回廊～Forest～」(<http://www.ce73.com/sekaishi.html>)
- ・「海上交易と世界の歴史」(<http://www31.ocn.ne.jp/~ysino/index.html>)
- ・「歴史研究所」(<http://www.uraken.net/rekishi/reki.html>)

本稿は、岐阜県高等学校教育研究会公民・地歴部会「会報48号」に掲載の拙著を転載（一部加筆）したものである。